

に其の父の為に広く功德を修る。因果の理に信はざらむや。

幼き時より網を用魚を捕りて現に悪しき報を得る

縁 第十一

幡磨国飾磨郡の濃於寺に、京の元興寺の沙門慈心大徳、檀越の請に因りて夏安居の間法花経を講く。時に寺の辺に漁夫有り。幼きときより長るまで網を以ちて業とす。後の時に家の内の桑林の中に匍匐ひ、声を揚げて叫号びて曰はく「炎火身に迫る」といふ。親属救はむとすれば、其の人唱ひて言はく「我れに近くことなかれ。我れ頓に焼かれむ」といふ。時に其の親寺に詣でて、行者を請求む。行者呪する時に、良久にありてすなはち免る。其の著たる袴焼かれて、漁夫悚慄り、濃於寺に詣でて大衆の中にして罪を懺い心を改め、衣服等を施し、経を誦ましめ竟りぬ。此れより以後、また悪を行はず。顔氏家訓に云ふが如し「昔江陵の劉氏、蟬の糞を売ることを以ちて業とす。後に一の児を生み、頭は具是れ蟬にして頸より以下は、方人の身と為る」といふは、其れ斯れを謂ふなり。

人と畜とに履まるる 髑髏救収められて 霊しき表を示して現に報ゆる 縁 第十二

高麗の学生道登は、元興寺の沙門なり。山背の恵満の家より出づ。而往大化二年丙午に宇治橋を営りて往き来りし時に、髑髏奈良山の溪に在りて、人と畜とに履まる。法師悲ひて従者万侶をして木の上に置かしむ。同じき年の十二月の晦の夕に迄りて、人寺の門に來りて白さく「道登大徳の従者万侶と由無し」といふ。すなはち万侶を將て其の家に至り、閉ぢたる屋よりして屋の裏に入る。多く飲食を設く。其の中に己が分の饌を以ちて万侶と共に食ふ。其の後夜にして男の声有りて万侶に告げて曰はく「吾れを殺せし兄來らむ。故に早く去れ」といふ。万侶怪びて問ふ。答へていはく「昔吾れ兄と共に交易に行き、吾れ銀四十斤ばかりを得たり。時に兄妬忌みて吾れを殺して銀を取りき。爾れより以還、多く年歳を経て、往き來る人と畜とみな我が頭を

施主。椽家長公をさす。一云夜具。底本訓釈「被(不須方)」。一云明日物を得ることは今この被を盗んで出て行くことに及ばな。一明日得る物」と取被而出とを比較し、「取被而出をえらぶ。一云このあたりを、今昔物語集・四ノ三十七は「立留、音ノ有ツル方同ヒ見ルニ、人不見ヌ。只ノ牛有り。僧此ノ音ニ恐レテ返リ留ヌ。傳ヲ思フニ、牛ノ可ク云キニ非ネバ、怪ビ思ヒ乍寝ヌ。其ノ夜ノ夢ニ、僧牛ノ辺ニ寄タルニ、牛ノ云ク、我ハ此レ、僧ノ家主ノ父也。……ト云フ、ト見テ夢覺ヌ」としている。僧の夢の中で牛がことばを發した、としている。今昔物語集では人と動物との言語を介しての交渉は夢の世界でのみ許容されたとする森正人の指摘がある。本書では、夢の中、という設定無しに動物が人のことばを發している。動物の發話については扶桑略記も疑問を呈している。一云養老令では六歳以上の男子には二段の口分田が給された。口分田には一段につき二束二把の田租が課せられた(田令)。本説話では、男子に給せられた口分田の稲をその男子のために用いず、他のために流用したことを、問題としている。「束」は、稲をはかる単位。十把。稻一束から米五升がとれる(今義解・田令)。三た束は法苑珠林・債負篇・應縁所収の説話十一話中三話が牛に転生して前世の債を償う内容。この型の説話は多い。二 転生は証規によつて証明される。証規は物品であることが多いが、行動であるばいもある。三 午後三時から五時のころ。橋本万平によれば、奈良時代には「時」が用いられ、平安時代に入つてから「刻」が用いられた。三より高い地位の存在(たとえば人)への転生を暗示する。

第十一縁 悪業についての現報説話。三宝 絵・法六に引用。

一 兵庫庫裏磨磨郡、姫路市あたり。二 未詳。三 本書では「故京元興寺之村(中巻二十九縁)」といった例外もあるが原則として飛鳥の本元興寺は単に「元興寺」と表記され、平城京の元興寺は「左京元興寺」と表記される。本説話のばいはい平城京の元興寺であろう。平城京への移転は養老二年(七二〇)。四 未詳。本説話以外の所伝をみない。五 四月十六日より七月十五日に至る期間、僧尼は外出せずに、心を静めて修行した。これを「夏安居」「安居」という。なぜ夏季におこなうか、ということについては、四分律行事鈔・上ノ四は夏のそなえている三つの欠点をあげて理由とする。その第二は「損(傷)物命(命)」。進(慈悲)深。六 妙法蓮華経、八巻。あるいは七巻。安居縁起によれば、天平勝宝元年(七五七)、孝謙天皇は安居法会を創始し、京畿十餘寺、七道六十餘国に妙法蓮華経と金光明経とを講演せしめた(東大寺要録八)。七 底本訓釈「漁夫(二合)、魚取男」。八 底本訓釈「迄(至也)」。九 物命を損傷しないために、と行う安居の期間中である。漁夫のおこないは、他の時期よりもきびしく非難されたのであろう。一〇 「行者」とあるのは上巻の慈心大徳をさすようにも読めるが、本書では「行者」と称されるのは優婆塞がほとんどである。本説話のばいはいも慈心大徳ではなく別人の優婆塞をさすか。一 底本訓釈「橋波加末」。二 北齊の額之推(壹一五〇)の撰。この文は帰心篇にみえる。弁正論七所引の文に拠る。三 中国湖北省。一 底本訓釈「劉音、利子反」。二 一ウナギ。一 底本訓釈「鱈(奈加天)」。一 鱈(ムナギ)(名義抄)。一 底本訓釈「鱈(阿川毛乃)」。一七すべて。

踏む。大徳慈を垂れ、見苦を離れしむ。故に汝の恩を忘れず、今宵報ゆらくのみ」といふ。時に其の母と長子と、諸の霊を拜まむが為に其の屋の内に入り、万侶を見て驚き畏りて其の到来る所以を問ふ。万侶是に具に前の事を説く。母長子を罵りて曰はく「呼矣、我が愛子は汝に殺さる。他の賊にあらざるなり」といふ。すなはち万侶を礼みて、更に飲食を設く。万侶還来りて状を以ちて師に白す。夫れ死霊白骨すらなほし此くの如し。何にいはむや、生ける人にしてあに恩を忘れむや。

女人風声なる行を好み仙草を食ひて現の身に天に飛ぶ

縁 第十三

大倭国宇太郡漆部里に、風流なる女有り。是れすなはち彼の部内の漆部造磨の妾なり。天年風声を行とす。自づから悟りて塩麩を心に存む。七の子を産生み、極めて窮しく食無し。子を養ふに便無し。衣無く膝を綴り、日々に沐浴みて身を潔め綴を著る。毎に野に臨むときは草を採ることを事とす。常に家に住るときは家を浄むることを心とす。菜を採り調へ盛り、子を唱ひ

端坐して咲を含み馴へて言はく「敬を致して食へ」といふ。常に是の行を以ちて身心の業とす。彼の氣調恰も天上の客の如し。是れ難破長柄豊前宮の時、甲寅年に、其の風流なる事に神仙感応し、春の野に菜を採り仙草を食ひて天に飛ぶ。誠に知る、仏の法を修はずして風流を好まば仙菜感応することを。精進女問経に云ふが如し「俗家に居住るとも心を端しくして庭を掃かば五の功德を得」とのたまふは、其れ斯れを謂ふなり。

僧心経を憶持ちて現報を得奇しき事を示す縁 第十四

釈義覚は、本百済の人なり。其の国の破るる時に、後岡本宮に宇御めたまひし天皇の代に当りて、我が聖朝に入りて難破の百済寺に住む。法師の身の長七尺、広く仏の教を学びて心波若経を念誦む。時に同じき寺の僧慧義といふひと有り。独夜半に出で行く。因りて室の中を見れば光明照り耀く。僧すなはち怪び、竊に牖の紙を穿ちて法師を窺看れば、端坐して経を誦み、光口より出づ。僧驚悚り、明日に悔過して周く大衆に告ぐ。時に覚法師弟子に語りて言

第十二縁 あやしき表(一)の説話。善業についで現報説話。今昔物語集・十九ノ三十一に書る。扶桑略記・大化二年条に引用。

六 底本訓釈(履)不万(留)か。一 底本訓釈(醜)上音毒反、下音樓反、(二)合か、(止)加之良。二 下巻二十七縁。三 高句麗の僧か。書紀・白雉元年条にも、道登が(高麗)の故事を引いて弁じている記事がある。本書では、中巻七縁の智光の弟子が(高麗)とされている。三 大化元年(六四六)。十師に任ぜられる。白雉元年(六四七)。白雉が祥瑞であることを弁じている。宇治橋断碑に「世有(高麗)子、名曰(高麗)道登、出(高麗)山尻、惠満之家、大化二年、丙午之歲、講(高麗)立此橋、濟(高麗)人畜」とみえる。三 本元興寺。

三 宇治川にかかる。橋の意に用いる。一 橋は、(高麗)に由来する文字(箋注倭名類聚抄)。二 底本訓釈(營)作也。三 奈良市と京都府との境の丘陵。大和から山城への経路。三 底本訓釈(漢)佐波爾。元 宇治橋断碑に「(高麗)度人畜」とある。原文「(高麗)人為畜所覆」。底本訓釈(畜)介毛乃爾。これより推して、「(高麗)所」の被動は「(高麗)に覆らる」と訓んでおく。三 高麗地はならざる所に葬られた死屍が、生者に移葬を求め、「高麗地」に葬られて安寧を得た。と語り説話(異伝・七・商仲城、搜神記・十六・文類、広記・三二・哀無忌、太平御覧・七・八所引幽明録・尋陽參軍など)の承譜につらなる。二 下巻二十七縁。三 十二月の晦の夜には死者の魂がこの世に帰つて来る、とされた(和泉式部統制・三、曾丹東三、徒然草・十九。底本訓釈(海)川支已毛利)。三 底本訓釈(頃)己乃己呂は誤写本文にもとづく。三 今夜でないならば恩がえしをする方法が無い。三 底本訓釈(裏)内也。

三 死者の魂のために飲食が供えられている。敦煌本搜神記・侯光侯周、広記・三二〇所引幽明録・任懐仁には類話が見える。殺された男が死屍に食を供してくれた男に報恩しようとして自分の家に伴い行き、死者を祭るために供えられた食を男に食べさせるのだが、その場に自分を殺した男がいるのを見て逃げ出した、とある。二 下巻二十七縁。底本訓釈(饌)与(久)良比(毛)乃(口)。三 重さの単位。和訓は「はかり」。銀は大制ではかゝる難念。大一斤は六〇〇、から七〇〇ほど。毛 底本訓釈(妬)忌(合)、宇良也見(口)。

一 諸霊を拜する時(後夜)は、上巻三縁で童子と鬼とが争つた時である。二 ようす。三 中巻十二縁は(豆)人心(忘)思(懸)とし、イメージの結びつきをみせている。

第十三縁 「仏教」を知らない人であっても、そのおこないが仏教にかなえばおのずと善果を得る。「みさを」なるおこないは仏教にかなうものである、と示される。今昔物語集・二十ノ四十二に書る。

四 国会図書館本訓釈「風声(三左平)」、底本訓釈「風流(二合)、美佐平」「氣調(三佐平)」。本説話では「みさを」の表記を「風声」「風流」「氣調」と変化させている。「風声」「風流」「氣調」は、態度、心の状態、を意味する語。評価すべき態度、すぐれた心の状態、をいう。「行」とされているのだから、かなり具体的な限定されたものをさしている。本説話では、「日々沐浴、潔身」「浄」と家を「心」といった、身辺を清浄に保つ生活態度をさす。菜食が述べられるのも、穢れを去つた生活態度ととらえてのこと。下文の精進女問